



# 戦前中国の風俗絵はがきの世界

(近藤恒弘氏 寄贈)

支那に於ける民衆風俗 第三輯

菊池敏夫 (非文字資料研究センター 研究員)



図1 支那に於ける民衆風俗  
POPULAR CUSTOM OF CHINESE

包みの表紙を飾るのは、円形琴筒（共鳴筒）の二胡を奏でる中国美女である（図1）。二胡は、馬の尻尾で作った弓を用いて擦弦演奏する点はバイオリンなどの弦楽器と変わらないが、二弦の間に弓を入れて奏でる。琴筒が円形であるのは、二胡を立てて演奏するときに琴杵を動かし易くするためである。糸巻きが3本あるのは変種と考えられる。二胡は、琵琶と並んで民衆に最も馴染んだ楽器で、民衆風俗を代表するものの一つである。

「苦力」と書いて、一般に「クーリー」と中国語読みをする（図3）。19世紀後半にアメリカなど海外に出稼ぎに出た中国人労働者を指すこともあるが、ここに登場するのは、極めて低い賃金で肉体を使う単純労働に従事し、天津、上海など大都市社会の最下層を形成した人々のことである。彼らの多くは、山東省、江蘇省北部（江北）など、貧困な農村地域からの出稼ぎ労働者である。苦力の仕事は、埠頭の荷担ぎ、一輪車や人力車の車夫などに代表される。苦力は低賃金でその日暮らしのため結婚もできず、そのほとんどが文盲であった。港湾をもつ大都市には苦力たちがあふれていた。上海埠頭では、荷揚げや荷下ろしの作業は人力に依存することが多かった。大きな貨物を肩に担いだ苦力の、途切れることのない長い行列は、初めて上海に下り立った外国人に「これが中国だ」といわんばかりの極めて強烈な印象を与えた。このため、上海の埠頭ではクレーンや運搬器具類の導入が遅れたが、これを「人力が機械を駆逐する」と評し、中国停滞社会論へと展開する外国の研究者もいた。また、人力車夫について見ると、上海では1874年に人力車が日本から持ち込まれ、1920年代以降、自動車の時代が到来しても、人力車は、その低料金のために長く生き延びることができ、中国でそれが路上から消えたのは1980年代であった。車夫の生活は苦力のなかでも最もひどいとされ、老舍「駱駝祥子」（『宇宙風』半月刊、第25期～第48期、1936年9月～1937年9月、に連載）では、農民出身の人力車夫である祥子（ヤンツ）が、まじめに努力をしながら自立しようとするが、社会や身のまじまじな出来事に翻弄され、不幸のうちにルンペン・プロレタリアートに落ちぶれていく姿を描いた。また魯迅は「一件小事」（『呐喊』北京新潮社、1923年、に収録）で、社会の最底辺に生きる人力車夫の愛他的行動を通して主人公の知識人が自分の利己主義と卑小さに気づき、自分を悔い改めようとする姿を描いている。



図2  
PUBLISHED BY TAISHO, P. T. & Co.



図3 苦力の路傍飲食  
EATING OF THE KURI BY THE ROAD.



図4 路傍の衣服競市  
THE AUCTION MARKET OF CLOTHES.



図5 飲食店の集り  
THE GATHERING OF THE EATING-SHOP.



図6 一輪車の食物賣  
CHINESE FOOD-SELLER OF THE SINGLE WHEEL.

露店商は、中国では「攤販（タンファン）」という。「攤」は「平らに広げ並べる」という意味である。路上に台を置き、あるいは敷物を敷いて、商品を並べて売り、食事を提供する（図4）。屋台の場合もあるが、移動できるもの、臨時に出店するものが多い。高級品や高級料理を提供するのは店舗を構えた商店の仕事で、露天商は安い飲食物を提供し、安い食料品、衣料、日用品、雑貨などを売る。遊芸場の軽食、ドリンクショップや土産物店も小規模なものは「攤販」と呼ぶ。第三輯に登場する「飲食店の集り」（図5）、「苦力の路傍飲食」（図3）は苦力たちの生活を彷彿とさせる。彼らが食事をする場所は苦力向けの労働者食堂の場合もあるが、主には「攤販」である。朝食、昼食時には苦力たちが群がる。椅子のようなものがあれば座るが、なければしゃがむか、または立ったまま食事をするのが一般的で珍しくもない。ただし、肉と野菜を油炒めにした丼物を立ったまま路傍で食べる姿は、つい最近まで上海の街角でもよく目にしたから、これは苦力の専売特許では決してない。「一輪車の食物売」（図6）で、背後に見えるのは屋台型の「攤販」である。一輪車は、貨物運搬、人の輸送、その他に、さまざまな形で使われる。ここでは移動する「攤販」として食物を販売して回る。

1949年以前の中国ほど苦力を初めとするいろいろな種類の都市下層民、多くの細民の活躍が社会活動を支えてきたところはない。交通運輸や物資の集散地の荷役の苦力だけではない。都市雑業層と一括して称されるが、都市にはさまざまな雑業があった。物乞い、花売り、娼婦、靴磨き、繕い物師などあげればきりが無い。紡績工場の若い男女の労働者も下層民である。彼らが日に何度となく利用するのが「攤販」である。「攤販」は自らも零細の商人であったが、都市雑業層が社会層としては極めて安定していたため、比較的安定した収入を得ることができた。また「攤販」は種類や数が多く、下層民以外の人々が利用するものも多く扱っていたので、不況期や経済混乱の状況に際しては店舗をもつ商店や百貨店の経営を脅かすこともあり、実は侮れない存在でもあった。

農村のような地縁、血縁のほとんどない都市で下層民はどのように生活していたのか。彼らが都市で生活するには収入を得るための仕事に就くことが不可欠である。彼らが唯一頼るのは口入れ屋であった。口入れ屋は企業・雇い主と苦力など下層民との間を取り持ち、その両者から収入を得る。その口入れ屋の総元締めが上海では青幫（チンパン）という都市型の「秘密結社」である。青幫はまず上海の資本主義労働市場の最重要部分を掌握し、それをテコにして次に租界行政、都市行政に極めて大きな影響力を行使していった。